

「くらげのゆぐえ」

登場人物 ..

男

女 1

女 2

作・サカイリユリカ

【1 夢】

舞台上には、長細い折りたたみ式のテーブルが脚を上に向けて逆さまになって置いてあり、それを覆うように一枚の大きな白い布がかかけられている。

男がひとり、少し離れたところに佇んでいる。男は一言も発さずにこの場の様子を見ている……。

初老の女が一人、テーブル近くに立ちすくんでいる。

女1、ゆっくりとテーブルの傍にしゃがみ込み、「それ」に話しかける。

女1 お待たせ、ごめんね待たせて。寒くなかった？

おなかすいたでしょう、家に帰ったらご馳走作るからね、たんとお食べね。

さ、早く一緒に帰ろうか……

女1、布越しにテーブルに触れ、そのテーブルを抱え込むようにおそるおそる抱きしめようとする。

女1 ああ、こんなにあなた大きかったかしら ちょっと見ないうちに……

女1、おもむろに布をめくって中を確認したかと思うと、床に突っ伏す。

女1 やっぱり違うわ、違う、あの子じゃない……

場が沈黙に支配される……

女2、登場。男の姿を目に認めると、無言で歩み寄り、

女2 あなた

ゆるやかに暗転する。

【2 決意】

女1と女2が住む家。先ほどのテーブルは今度は脚を地につけてテーブルとして置かれており、その上に白い布がテーブルクロスのようにかけられている。

そのテーブルの上に突っ伏して寝ている女1のもとに、女2が外から帰ってくる。

女1、夢から目覚める。

女2 たいま

女1 おかえりなさい どうだった

女2 (首を横に振って) もう誰も。数か月前まではあんなにあふれかえていたのに、綺麗さっぱり

女1 難航しているんでしょうね きっと

でもね、最近あの子が帰ってくるような気がして

今もどこかでこっそり生きていて、ある日突然、何事もなかったかのように帰ってくる・・・なんだか、すべて夢だったんじゃないかと思えるの

女2、無言で靴から書類を取り出し、テーブルに置く。

女2 これ、もらってきました

女1 (書類に目を落として) え

女2 もちろん、私だってあの人のこと、認めたくありませんよ。でも、

女1、女2が置いた書類を取り上げる。

女1 どうしてこんなもの・・・だいたい、結果もまだ

女2 DNA鑑定ですか？あんなもの、いつまで待てばいいのか

もう最近は、待つことにすら慣れてしまっ、いえ、あきらめているわけではないのです ただ私は

女1 あの子は、見つけてくれるのを待ってる、私たちしかないじゃない、どこかで寂しがっているだろうに。

私は・・・あの子をもう1度この手に抱くことさえかなわないっていうの

女2 私だってあの日から、生きた心地がしません。

たぶんね、あの日から私は半分死んでいるのだと思います

それでもあの人を探して駆けずり回っているときはそういうことを少し忘れられた・・・

女2、書類を書き始める。

女1 やめて、やめてったら！

女2 お義母さん 私だってこんなことしたくないですよ

でも私たちは生きていかなきゃならない わかりますよね

これを出せば保険だっつて

女1、書類を女2からひったくるとびりびりに破いてしまう。沈黙が流れる。

女1 おかしいでしょう だっつてあの子はまだ帰ってきていないのよ

見つかるまで待つのが家族でしょ

女2 家族・・・家族として今、してやれることってなんですか

今日、がらんどうの体育館に、小さな仏壇だけがぽつんと置いてあって、気づいたんです ああ、そういえばもうじきお盆が来るんだなあっつて

女1 だからって今死亡届を出すことは

女2 選ばなきゃなりません このままでいるか、先に進むか

私はこのままでいることには耐えられないんです

女1 どうしてよ あなた他人だからそんなこと言えるんでしょう

血も涙もない・・・どうしてそんな

女2 お義母さん、お義母さんは毎日、自分が何しているのか知っていますか？

ずっと家にこもって、日がな一日、写真だの眺めて、

女1 やめて

女2 うわごとみたいに、あの人の名前を呟くように口を動かして。

それで何が変わるんです、

女1 こわいのよ、忘れてしまいうそで、いいえ忘れることなんてないのだけれど、

それでもね、あの子は毎日思い出しても思い出してもだんだん消えていってしま

う・・・思い出せなくなっていく気がするの、こわいの

女2、破かれた書類の破片を拾っていく。

女2 あのね、じゃあ、あの人の思い出を一緒に詰めませんか

無言で顔を見合わせる2人。

静かに、仏壇用のおりんの音のような、風鈴の音のような透き通った響きが空間に染みわたる――

続